

アトリエ 琉游舎 だより 229号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年4月22日発行

夏にこそ 咲きかかりけれ 藤の花 松にとのみぞ 思ひけるかな 源重之

源重之

- 藤は蔓性ですから何かに絡んで成長します。そのため、現代では山での自生以外は藤棚に仕立てることが一般的です。しかし私は藤棚の藤づくしには人工的な美を強制されているように感じてしまいます。それより、たまさか車で通りがかった山の斜面に咲く遅咲きの山桜と、それに絡まる山藤の美しさに目を奪われたことが忘れられません。蓮池の水面に映る淡い紫色の山藤の姿も、またそれに劣らず、自然とともにある美しさを私に与えてくれます。
- 近世以前の藤は棚仕立てではなく、松の木に絡ませて生育していました。上記は平安貴族、源重之の和歌です。「春に咲き始めた藤の花が、夏にまでかかって咲き続けている。かかるのは松だけとっていたよ」と「春から夏へ」が「藤が松に」と「かかる」藤と松の関係を前提にしていることが分ります。また藤の花房は風で揺れる様が波に見られて、すでに万葉集から「藤波」と表現されています。古来から藤は日本人の目も心も楽しませた花なのです。
- 蔓性の藤は自生しているのに何かに絡んで成長していくので、寄生のイメージが拭えません。そこで象徴として連想されるのは藤の字を冠した藤原氏です。天皇の補佐と言えは聞こえがよいのですが、天皇と言う松の幹に寄生して権力をほしいままにしてきたとも言えそうです。娘が産んだ子供を次々に天皇にする外戚という地位を手に入れ、長い間権力を握ってきました。男系天皇の伝統の事実は、実際の権力は外戚の藤原氏が握り天皇を操り人形（傀儡）としてきた現実です。それを「伝統と言われてもなあ」と言うのが私の正直な感想です。
- 正直ついでにもう一つ正直な感想を。丘一面、山一面、公園一面が花づくしという光景をテレビでよく見かけます。それは自生しているというよりも、観光資源としてある種の花を一面、隙間なく植え尽くしたと言う様です。さくら、チューリップ、ネモフィラ、芝桜、コキア、藤、など様々な花づくしの名所があります。数には圧倒されますが、私は美しいと思ったことはありません、私は集団美より、花の一輪、一房の美に引かれてしまいます。

写経会 5/3 (日) 13時半 読書会 4/28・5/12 (火) 13時半

狂言綺語…解放(カミとホトケの出会いⅤ)

歩道に植えられたツツジに、薄緑色の手のひらくらいの大きさのものが張り付いたように動きません。大きな葉っぱか色紙が風に舞って辿り着いたかのような光景です。ソメイヨシノはすでに散ってしまい、山桜は若葉と花が同居して黄緑と薄ピンクの対比が鮮やかです。周りは低木も高木も若葉が芽吹きはじめ、全体が春霞に覆われた色彩の中へ朝日が差し、この時期でしか味わえない風景です。里山の淡い緑色の朝です。

それは景色全体が薄緑の中に、保護色ようになって動かない二対の蛾でした。二羽が向かい合ったまま全く動きません。写真を撮ろうと至近距離まで寄っても飛び立つこともなく、生きているのか死んでいるのかも分からないような状態です。これもまた先日遭遇した狸寝入り、生き物の擬死状態かとも思いました。早速AIに聞いてみたところ、それは日本にすむ大型の蛾（ヤマユガの仲間）で「オナガミズアオ」という準絶滅危惧種の名前でした。子供の頃の夏の朝、よく見かけた私の蛾の記憶は、太い胴体と黄土色に毒々しい模様の羽。その開いたままの羽が朝の窓辺にくっついている姿は、何かまがまがしいもののよう思われて、気持ちのよいものではありませんでした。ところがオナガミズアオは、全体が薄い水色で、透明感のある色合い。後翅の尾が長く伸びて、ひらひらと優雅に見えます。その色合いとじっとして動かない佇まいに、私はオナガミズアオの儂いのちを感じてしまいました。実際、AIの説明によると、オナガミズアオの成虫は、およそ数日から長くても1週間前後くらいの寿命と考えられているとのこと。また成虫になると口がほとんど機能せず、何も食わずに生きていて、羽化してからは、ほぼ交尾と産卵のためだけの期間となるということです。つまり子孫を残すために羽化して、この世に儂い姿を現したのです。事実、朝の六時に見つけたときから午後の三時くらいまで、二羽は向き合ったまま全く動かず体を合わせたままでした。暗くなる前にもう一度確かめに行くと、今度は体を離して互いの位置が変わっていました。交尾を終えて、産卵の準備ができたのでしょう。翌朝、二羽の姿はもうありませんでした。産卵の場所を見つけに飛び立ったのでしょうか。

私が「カミとホトケの出会い」について考えるきっかけは、神仏習合がなぜ日本人の宗教観の根底を作っているかを、理性によってでは理解できなかったことにあります。仏教寺院の中には、今でも様々な「神」が祀られている事実、明治維新の神仏分離令までは、神社と寺院が同居していたという事実、廃仏毀釈以降も人は神社にも寺院にも分け隔てなく初詣やお払い、祈祷に出向くという事実。いずれも信と慧と行で安らぎの日々を実現したいと考えて日々を過す私の理性的思考では全く理解できないことでした。そこで狂言綺語では十回にわたって、理性では理解できない理由を考えてきました。そして辿り着いた結論は、「カミ」とは、自然と語り暮らし共棲する「精神」のありよう。「ホトケ」とは、その自然を無常（ありのまま）と観て、ありのままに自然と語り、暮らし、共棲する「智慧」であるということです。自然は森羅万象、私たちの存在する場所のありのままの姿です。無常は森羅万象をありのままに観ることです。このカミとホトケの出会いと習合が今の私たちの精神と智慧の基盤となったとすることを、私の信行経験をもとに、私自身が納得し理解できることとして記述してきました。もとより学術的な裏付けも論証もないことは承知の上ですので、私はこれらの記述が客観的に正しいかまちがっているかを問うことはいたしません。しかし、少なくとも私がかつて学んだ、西洋哲学（アイデアと理性）の呪縛から自らを解放できたということは間違いありません。つまり、カミとホトケの出会いが私たちに与えてくれた精神と智慧は、この日本の自然とそこに生きる日本人が、安らぎの処に向かって歩み続ける唯一の必要十分条件であることが分ったのです。逆にアイデアも理性も私の信行の歩みを阻害する論理であることが認識できました。西洋論理の呪縛からの解放です。今、私は「カミとホトケの出会い」の意味を、信行の観点から十分に確信できた、信行の自由の中にあります。

私は「カミとホトケの出会い」について、日本の自然と精神の視点で記述してきました。そこには、いわゆる宗教も、お釈迦様も法華経も日蓮聖人も、数多の仏、菩薩、祖師たちも必要ではありません。正確に言うと、宗教も、宗教者の誰が何を考えどのように行動したかといったときの、「誰が」という固有名詞も「何を」「どのように」考え行なったかの事跡も必要のないという意味です。まして、それらを後付でまとめた「教理」も必要ありません。固有名詞と事実は既に、「自然」と「無常（ありのまま）」の時の中で、私たちの前に「カミとホトケ」となって、現われているからです。私たちの精神と智慧の血肉となっているからです。自然の営みとその自然と対話し共棲してきた生きとし生けるもののいのちが、今ここにある森羅万象のものとして、私たち自身の内にあるからです。森羅万象は私たち一人一人の中にあるとともに、私たちは、森羅万象の中にある限りなく無(空)であるいのちのひとつでもあるのです。あの狸寝入りをしていた箱罌の中の擬死狸も、薄緑色の春霞に溶け込んで動かないオナガミズアオも、そしてそれを観る私も、カミとホトケそのものであり、その無限の精神と智慧を、有限の生の中で繋ぐ一匹、一羽、一人なのです。

カミとホトケについての考察はこれが最後でしょう。お釈迦さまの弟子となって15年。その歩みの中で得た仏教者の視点から、自分の信行を理解しようと試みるそのものが私の信行の道でした。それは仏の智慧を頼りの歩みです。しかし今私は、その仏の智慧だよりの歩みからも解放されたのでしょう。カミとホトケの視点の獲得ができたからです。恐らく私は60年近く前の今頃、狸寝入りの擬死狸にも、交尾する二対のオナガミズアオにも出会っていたに違いありません。しかし、それが互いのありのままと認識するまでには60年近くの年月が必要だったのです。私が生の歩みを始めて68年、アイデアも理性も仏の智慧からも解放されたと宣言する今、それが真の自由と解放ならばこれからの私が何処に歩いていくのか、我が事ながら楽しみです。